

周参見港の「みなと文化」

木村 甫

目 次

第1章 周参見港の整備と利用の沿革.....	67-1
1. 古代.....	67-1
2. 中世.....	67-1
3. 近世.....	67-2
4. 明治時代.....	67-2
5. 大正時代.....	67-3
6. 昭和・平成時代.....	67-3
第2章 「みなと文化」の要素別概要.....	67-5
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」...	67-5
(1) 芸能.....	67-5
(2) 文芸.....	67-5
(3) 信仰.....	67-6
(4) 人物.....	67-9
2. 交易による流通市場の形式によって育ってきた「みなと文化」.....	67-9
(1) 物資の流通を担う産業.....	67-9
(2) 交易物資の保管施設.....	67-9
(3) 行政施設.....	67-10
3. 船路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」.	67-10
(1) 港湾利用産業.....	67-10
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」.....	67-11
(1) 遊里.....	67-11
(2) 文芸.....	67-12
(3) 祭り.....	67-13
(4) 施設.....	67-13
5. 港を中心とする社会的、経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」.	67-13
(1) 港発祥の地.....	67-13
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き.....	67-15
1. 稲積島の保存.....	67-15
2. 王子神社絵馬の保存.....	67-15
3. すさみ八景.....	67-16
4. ユネスコによる「世界遺産」の指定.....	67-16

所在地：和歌山県すさみ町

港の種類：漁港

港格：第2種漁港



【位置図】



【現況写真】(すさみ町 2001 年町勢要覧より)

第1章 周参見港の整備と利用の沿革

1. 古代

周参見湾口の中央に標高 80m、周囲 1,100m の、樹木の生い繁った「神名備」型の小島がある。古来住民より全島神聖視され、土地の守り神として信仰されてきている。

この島のおかげで、周参見港は枯木灘唯一の避難港として古くから栄えてきた。湾内には「安堵」「波なき」等の名の場所があり、また弁財天の神社が鎮座している。

島名「稲積島」と言い、神武東征の際の避難港であったと言う伝説を秘めている。



【稲積遠景】(写真提供：周参見公民館)

周参見湾西の丘上から 1970 年、造成工事中に古墳が発見された。発掘調査の結果、武器・工具・装飾品・土器などが出土した。築造年代・被葬者などは不明であるが、古くから避難港として栄えてきた経緯を考えると、土着の豪族ではなく航行の有力者であったのではないかという感じがする。

2. 中世

中世のいつの世からか周参見の地は豪族周参見氏に支配されていた。観応 2 年 (1351)

の南朝の繪旨が文献初出である。藤原姓を名乗り、春日神社と王子神社を創建している。王子神社は熊野那智大社よりの勧請で、海上安全の神として熊野水軍であった一族の守り神であった。

中世周参見港は紀伊水道一帯を支配する水軍の根拠地であったらしいが、当時の様子を著した文献は残っていない。

3. 近世

近世、江戸浪速間の海運が盛んになり、船舶も大型化し、いわゆる千石船が運行されるようになった。帆走する千石船は天候に左右されることが多く、特に紀伊水道と太平洋上では天候の変化も大きく、周参見港の避難港としての利用の度合いも高まった。

明治 43 年（1910）編纂の「周参見村郷土誌」（以下郷土誌という）には、「周参見港より以南二色の袋港に至る海上 10 里一帯を枯木灘と称し、古来東牟婁郡大島港出帆の上り船は周参見港湾に寄港して風を避くる外他に良港無きを以て、その海上を枯木と称し船人の警戒する所なり」と書いている。

周参見には口熊野代官所があり、管轄内の各村から年貢米が船便で納入されていた。

「維新前は上は瀬戸鉛山から下は古座田原に至る各村より、年貢米納めん為秋より冬にかけて毎日米船の入港あり。これを御倉入れと称し五組の大庄屋をはじめ庄屋または地土帯刀者の往来繁く」（郷土誌）

また幕府の御城米役所が置かれており、非常時用の米が備蓄されていた。その集配もすべて周参見港を経ての船便であった。

藩は山村の細民救済の為村内に御仕入役所を置き、製炭・薪・木材の生産を奨励した。そこで生産される林産物は、すべて周参見港から積み出された。ほとんどの産物は千石船で運ばれたが、どれほどの荷が往来していたのか詳しい文献は残っていない。

また、漁業も漸時盛んになってきていた。

4. 明治時代

周参見港は引き続き多くの千石船で賑わった。王子神社に奉納されている絵馬の中の船絵馬 31 点のうち、22 点が明治期であることから推察することができる。

紀伊半島南部の陸路大辺路は当時なお峻険な山坂が多く難路であった。

全国的に汽船が普及してくるにしたがって定期便の寄港を強く望むようになり、明治 23 年（1890）熱田共立汽船が寄港するようになった。続いて串本神田汽船も寄港を始め、両者が競合するようになり、周参見の商業水産業も活気を呈したが、32 年（1899）寄港が中止された。

「その不便言うべからず。村内まるで火の消えたる心地にて世の不景気と共にいよいよその衰微を極めたり」（郷土誌）

明治 36 年（1903）、共立汽船を買収した大阪商船会社の汽船が寄港することになった。

「ここに周参見村は再び暁天を望み得て爾来商業に水産業にはたまた諸業の発展著しく、一大面目を改むるに至れり」（郷土誌）

この航路は長年にわたり就航していたが、鉄道開通の直前の昭和 13 年（1938）に廃止となった。

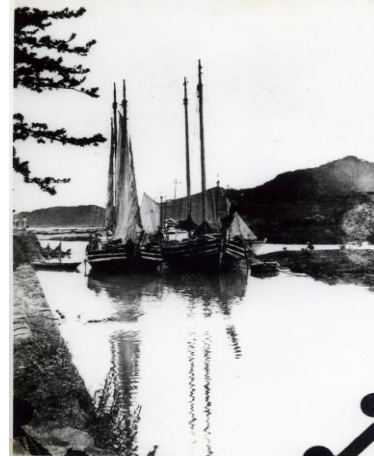
平松・小泊・下地の漁業も盛んになり、漁獲物の主たるものは鯉・伊勢えび・きびなご・かます・まぐろ・天草などで、これらは小型運送船によって近隣へ搬送されていた。

5. 大正時代

大正3年(1914)地区内で機帆船を建造、大阪方面に木材木炭を主として運送し、帰りに米・酒・雑貨を運んだ。経営は好調で次々と貨物船を建造し、8号船にまで及んだ。

しかし大正末期、経済恐慌のため営業不振となった。当時周参見港に属する機帆船は17隻であった。また田並村に小野運輸が創設され、串本・周参見・田辺間の貨物船が就航した。

漁業においては一段と進歩し、漁獲高も向上してきた。大正中期、鮮魚を氷詰めにして阪神方面へ運ぶ生船が出現し、市場直結の経済活動が始まり漁民の生活水準も向上した。



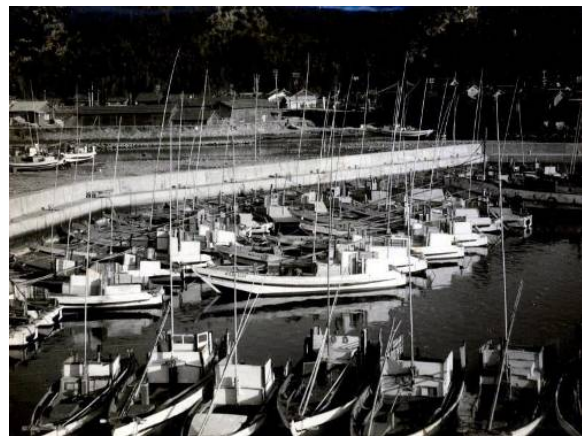
【周参見の川口で荷積を待つ機帆船】(写真提供：すさみ町誌より)

6. 昭和・平成時代

大正期に引き続き機帆船の活動期であったが、世界大戦勃発と共に青壮年男子の不足もあって、海運・漁業共に不振となった。また鉄道の開通がそれに拍車を掛けたのであった。

昭和の初め頃まで、周参見湾は自然のまま、何ら人工の手は加えられていなかった。

昭和5年(1930)、周参見出身で在大阪の実業家が郷土永年の懸案と失業対策の事業として、稲積島下の口の締切り工事に尽力することになった。当時の土木技術では相当の難工事であったが、半分



【昭和37年(1962)に一応完成した周参見漁港】(写真提供：すさみ町)

以上進んだ時台風襲来により現場は崩壊、復旧工事も残工事の継続も経済的に不可能になってしまった。そこでこの工事を県営に移管するよう運動の結果、それが実現した。

昭和9年(1934)、工事は完成した。これにより湾内は、悪天候時外海にくらべて一段と平静となった。

昭和26年(1951)、周参見港は第2種漁港の指定を受け、港湾改良のための第1次五箇年計画が認定された。工事は第2次、第3次と引き継がれ、同37年(1962)に一応完成した。

これらの工事により、それまで浜に引き上げられていた漁船が、常時係留できるようになった。



【昭和40年代(1965年頃)の周参見】(沼井観山画より)

それ以降現在まで港湾改良工事は断続的に続けられ、和歌山県によれば合計約50億円の経費を要して、現周参見漁港ができ上がったのである。この80年間で、自然のままであった湾の周辺はすっかりコンクリートで固められ、海上には突堤が幾筋も施工されたのである。



【平成7年から9年にかけて完成した現在の周参見漁港】

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

(1) 芸能

①淡路芝居

天保13年(1842)の古文書の中に、「淡路芝居参り候節浦祭り祈祷の為恵美寿神前へ(中略)翁上げの儀は先年より当所浜にて興行仕り候処(後略)」というくだりがある。

当時人形芝居(人形浄瑠璃)上演に人気があり、淡路島から紀伊半島沿岸の各所へ船便で興行に来ることが盛んで、例年来演していたらしいことが伺われる。

②地狂言

時代は明記されていないが、「祭礼後に毎年地狂言を開催するを例とす。先ず1ヵ月前大阪より振り付けと称する演劇の指南者を聘し寺院か薬師堂にて稽古をなし、宮又は空地に仮小屋して農漁村唯一の娯楽として老幼に観覧せしめたる時代もありしなり」(郷土誌)とある。

明治期になっても大阪からの陸路は険しく、徒歩では相当の日数を要したと思われるが、海路であれば指南役の招聘も用意であったろう。本場大阪から師匠を招くことにより、この地方としては随分垢抜けのした地芝居が演じられたことと思う。周参見の地が寄港地であったことの恩恵であろう。

(2) 文芸

①西行法師

「上田宇太郎所蔵の軸に西行法師の自筆なりとて

都にて月をあはれと思ひしは かずにもあらぬすさみなりけり」(郷土誌)

また郷土誌には、平安時代の歌人が周参見をうたった和歌として、次の3首を掲載している。

和深山世に古道をふみたがえ	まよひつたよふ身をいかにせん	源俊頼朝臣
和深山岩間に根ざすそなれ松	わりなくてのみ老やはてなむ	藤原清輔朝臣
身のうさを思ふ涙は和深山	なげきにかかる時雨なりけり	西行法師

源俊頼と藤原清輔はいずれも熊野御幸の供として、何度も熊野に来たのだらう。その時大辺路の陸路を通ったのか、海路を通ったのかは不明であるが、いずれにしても周参見を通過したことは間違いない。和深山は周参見の沿岸部にある山である。

②加納諸平

紀伊半島南部の田辺藩(安藤氏)と新宮藩(水野氏)にはさまれて、和歌山藩直轄の口熊野があり、そこを統轄する代官所が周参見に置かれていた。代官は本藩から派遣され駐在していた。天保年間の代官小浦広名が赴任する時、広名の師匠であり和歌山藩国学所総裁の加納諸平が、はなむけの歌をおくっている。

小浦広名が熊野へゆくうまのはなむけに	加納諸平
沖つかぜ天雲はふる	わだつみの神の御面に
唯むかう周参見の館は	八重山のをちこちにあれど
年招くいゆきまもれば	海山もむつたまあひて

霧のむた群山なびき 波のむた鯨ぞよらん
 海原も山もたひらに まもりたれこそ
 安郷代は浪しずかなりすさみの海 稲積島に釣しあそばへ

(3) 信仰

①周参見王子神社

天文 15 年 (1546)、当時の周参見領主左衛門太夫藤原氏安が、熊野那智神社の子神として建立した。

熊野那智神社は那智の大滝で有名だが、この大滝は前方の熊野灘から遠望でき、古くから沖を航行する船の「山あて」となっていたことから、海上安全の護り神として信仰されてきた。今でも遠洋漁業のマグロ船が帰港すると、まず本マグロ 1 本を神前に供えて航海安全のお礼参りをしている。



【周参見王子神社】(写真提供：すさみ町)

周参見王子神社は、当初熊野水軍周参見氏の護り神として祭祀されていたが、元和 2 年 (1616) に徳川幕府の成立により失墜した領主が、この神社の祭祀を地区住民に委ねた時から、土地の産土神となった。

これといった産物もない周参見では古くから船乗りになる若者が多く、地区住民は普段から航海の安全を願い厚く王子神社を信仰しており、神船 (みふね) の加わった例祭も、氏子が祭祀するようになってからは、専ら氏子の海上安全の祈願をこめたものとなった。

②周参見王子神社の絵馬

「絵馬堂には種々の掛額ありて興味感慨交々到るを覚ゆ。最も古きは安永 8 年 (1779) 9 月漁船中より芝居の奉額あり、文化には泉屋五郎右衛門船の額、文政には靱屋喜八郎の漁船あり。天保に海運の業発達せしと思えて自船の奉額夥し目近く散見せし船号を記さば (中略)。奉額中目を引くは元治 2 年 (1865) 乙丑初春願主当浦住大黒屋文四郎六十八歳翁自筆として開平開立の問題解説の額と (中略) 嘉永 2 年 (1849) 酉初夏奉納歌合の額あり (中略) 50 余吟を記す。何れもめでたし。判者副評の追加左 3 首あり。

うちかすむ浪間の舟はさくら鯛 めてのすさ見に釣りくらすらん
 斤量の錘の名ある初鯉 買わばや銀と釣かえにして
 大漁を祝ふ海士ともろ共に 渚におどる数のいろくす 」(郷土誌)

一般的に神社や寺院に奉納された絵馬は、吹きさらしの絵馬堂に掲げられることが多く、数年を経ずして退色したり破損したりするのが普通であるが、周参見王子神社の絵馬堂は雨戸のある堂であったため、200 年以上経過した今日でも、保存状態が非常に良好である。更に、昭和の中期、安全保存のためガラス張りの額に入れたことで、現在も鮮明な画像を保っている。

大型絵馬（90×180cm 内外）10 点、船絵馬（50×70cm 内外）31 点、算額・歌額・句額を含むその他が 14 点、総数 55 点が、境内にある歴史民俗資料館に保管展示されている。特に、大黒屋文四郎奉納の算額は、現在和歌山県唯一の物といわれている。また大版写真集「周参見王子神社の絵馬」（25×36cm）として印刷されている。



【和藤内の虎退治】

奉献時：文久 2 年 3 月
(写真提供：「周参見王子神社
の絵馬」から)



【船絵馬「蓬吉丸」】

奉献時：明治 12 年 12 月
(写真提供：「周参見王子神社
の絵馬」から)

③稲積弁財天神社

周参見湾口の中央に位置する稲積島は、古くから海上安全の神として信仰の対象となり、全島を神聖視して一木一草一石たりとも島外に持ち出してはならないと固く信じられてきた。次のような伝説が残っている。

「風待ちで周参見湾に船がかりしていた千石船が、やがて順風になり船出しようと帆を上げたが、船は一向に動かない。不審に思った船頭が土地の漁師にわけを尋ねると、稲積さんから何か持ち出して船へ積んであるのだろう、との返事であった。早速調べると、かしき（飯たき）の少年が小船で稲積島に行き、漬物の重し石を拾って置いていることがわかった。直ぐに石を稲積島へ返すと、千石船は難なく出港することができた。」（すさみ町誌）

いつの頃か、島の東側に祠が建てられた。安永 20 年（1643）の棟札には「紀州牟漏郡周参見荘電隅皇子」と神号が書かれているが、寛保 2 年（1742）の棟札には、弁財天宮と変わっている。この弁財天宮は現在まで漁民に強く信仰され、県外に出漁する漁船は出港

前に社前の海を何周か旋回してから出港するのを習わしとしていた。

以下はこの弁財天にまつわる伝説である。

「ある晩、下地の酒屋へ『お酒を売ってください』と色白の美しい女の人がやってきた。主人は『この辺では見かけない美人だ』と思いながらもお酒を売った。すると、その次の晩もまた酒を買いに現れ、それからは毎日のように買いにきた。

大変不思議に思った主人は、ある晩いつものように酒を買い急いで帰る後をそっとつけてみた。しばらくつけて浜へ出ると、突然今まで歩いていた人影がスウッと消え、海岸からは、ところどころ銀色ににぶく光る真白い帯状の橋が稲積へのびていた。そして浜木綿の茂みの中から1ぴきの白い蛇がニョロニョロと海へはいつていったのであった。

次の日、酒屋の主人は昨夜のことを近所の人々に話すと、一人の老人がこう言った。『それはきっと、昔からあの島に住んでおられる弁天様じゃ。弁天様はお酒がたいそう好きじゃと聞いとるからのう。』

それ以後、人々は弁天様にお酒を供えるようになり、漁師たちは、沖へ漁に出かける時には、稲積の弁天様にお酒を供えて大漁を祈願するようになった。」(すさみ町誌)

④下地蛭子(えびす)神社

この地方の漁業地では、えびす神は大漁の神として崇拝され、どこも必ずえびす神社を奉っている。「昔は潮流が上り潮の時は漁が多かったが、下り潮になると不漁が続いた。そんな時には豊漁の地のえびす神の御神体を盗んできて自分の所のえびす神社にまつると大漁になった」という言い伝えが残っている。

周参見では下地の他、平松・小泊の漁業地区でもえびす神をまつっている。

⑤精霊船

周参見では古くから盆の15日の夜、初仏のおくりを盛大に行ってきた。

中央に墓標を建てた3m位の船を作り、それに何十という提灯や灯籠を吊るし、様々な供え物をする。船先で松明を燃やし、提灯や灯籠に灯火を入れて海に浮かべた船は、鉦や花火におくられて掛け声勇ましい若者たちに湾外まで押し出されて行くのである。灯火をともした満艦飾の精霊船が、何十隻も連なってゆらりゆらりと湾内の暗い海面をゆっくり移動して行く様は、幽玄の世界さながらの光景であった。

最近では派手すぎることの反省による自粛と環境保全などの関係から、かなり規模が縮小され、舟の大きさは半分程度、提灯の数も制限し、湾内を一周してから浜に引き上げ、翌日焼却することとなった。



【8月15日の精霊船】

(写真提供：周参見公民館)

(4) 人物

①井上善助

近世、海上で活躍した多くの周参見人の中でもっとも代表的なのは、井上善助である。天保12年(1841)、摂津兵庫の中村伊兵衛の千石船栄寿丸の沖船頭であった善助(当時25才)は、同郷の堀弥市と乗組員11人と共に兵庫港で酒・砂糖・塩などを積んで奥州南部に向かっていた。が、途中犬吠埼沖で暴風に遭う。帆柱を切断された栄寿丸は太平洋上を120日間漂流し、偶然通りかかった異国船に救助されるが、乗組員は離ればなれになり、善助はアメリカのカリフォルニア半島南部へ送られた。各地を転々とした後中国から長崎に辿り着くが、長期間拘留され厳しい取り調べを受けた。ようやく周参見に帰ったのは弘化2年(1846)、3年5ヶ月ぶりであった。堀弥市はその翌年4年9ヶ月振りの帰京であった。

当時鎖国中の日本は外国の事情に暗く、紀州藩では学者を使って両者の漂流中や外国滞在中の見聞をまとめ、詳しい記録を作成した。中には2人が覚え帰った現地語が相当数紹介されている。また善助の口述した内容は漂流記として編纂された。後に善助・弥市は士分に引き上げられ、周参見浦二分口役所の役人に任じられた。

嘉永6年(1853)ペリーが浦賀に来航すると、幕府はアメリカ大陸や中国の見聞をもち帰った善助と弥市を江戸へ呼び出し、尋問を行った。また、両者は60人70人の武士たちの見守る中、アメリカの軍隊の調練の仕方を異国の服装で剣や銃を持って見て来たままに披露したという。善助はその後も紀州藩の海防関係の仕事で活躍し、明治7年(1874)に57歳で逝去している(杉中浩一郎「周参見浦漂流人に関する覚書」より要約)。

井上善助は頭脳明晰で教養もあり、非常に対しても冷静沈着に対応し、常に気力が充実した人格的にもすぐれた人物であったことが、彼の波乱に富んだ生涯の記録を見て強く感じることである。

2. 交易による流通市場の形式によって育ってきた「みなと文化」

(1) 物資の流通を担う産業

①船宿

川口から浜にかけて海に面した町筋には、船に関する来客の為の宿屋や飲食店等が並んでいたようであるが、記録は残っていない。

江戸から明治の初めにかけて、千石船をはじめ中小の帆船が風待ち風よけの為に寄港した頃は、おそらく乗組員の大部分は船中で生活していたと思われる。

明治の中頃汽船が寄港する頃から、1泊して翌朝乗船するという人たちの為に、海に面した町筋に宿屋が多くなったものと思われる。郷土誌には10軒の旅館名が掲載されており、その屋号の中には現在も続く家があるが、家業は変っている。

(2) 交易物資の保管施設

①倉庫(米蔵)

周参見は幕藩時代口熊野代官所の所在地であった関係上、管轄内157か村石高1,937石(すさみ町誌)の年貢米は、ほとんど周参見港を通じ代官所に納入されたり本藩へ搬送されたりしていた。

代官所は港から 1km 足らず離れた現周参見小学校敷地附近にあった。港からそこまでは小さい運河が通っており、満潮時前後に小舟によって米俵が運ばれ、代官所附属の米蔵に貯蔵されていたようである。

また、幕府の御城米（徳川幕府が直轄地または譜代の諸藩に命じて、軍事・飢饉に備えて貯蔵させた米）役所が周参見に置かれており、その貯蔵も兼ねていたため、相当大きな倉庫であっただろう。

「明治 9 年（1876）旧代官所附属建物米廩（米蔵）一棟に修繕を加えて校舎となし、本校を此所に移転す」（郷土誌）とあり、周参見小学校校舎に転用されたい。現在この米蔵跡には、小学校の鉄筋校舎が建っている。

（3）行政施設

①二分口役所

周参見川口に近い所に二分口役所（今の税関に当たる）があり、藩の役人が港に出入する船から積荷の評価に応じて口銭（くちせん＝年貢の付加税の一種）を徴収していた。二分口役所は明治になって廃止され、周参見警察署の庁舎になっていたが、明治 22 年（1889）の大水害で流失した。

②御仕入方役所

口熊野の百姓は不便な土地であるため稼ぎも少なく、年貢米も滞納する程生活が苦しかった。そこでそれらの百姓を救済するため、稼ぎ資金を低金利で貸付け、その資金で山産物を仕出し百姓の生活を維持させることを目的として、御仕入方役所が設置された。

周参見御仕入役所は、天明 8 年（1788）飢饉対策として設置されたものである。

木炭・木材・薪・杉皮・椎茸等の林産物が御仕入役所に買上げられ、これらの産物は周参見港から各地に向けて積み出されていた。

3. 船路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

（1）港湾利用産業

①漁業

周参見の漁業の変遷は大要次の通りである。

郷土誌によれば、はじめは幼稚なものであったが来漁船から漁法を伝習し、江戸中期には鰹釣・マグロ釣漁をはじめており、エビ網やイワシ網も年代が古い。

江戸末期になると釣りは下げ釣りや竿釣りで、網は小網・サイラ網・ボラ網・ナゴ網・4 艘張磯打網・立切網等であった。ボラ網とナゴ網は漁獲があると地区民に分配された時期もあったという。

明治に入るとタイの下げ釣りやはえ縄漁、ブリ網などがはじまる。中期にはサバのはえ縄漁やカマスの掛け網をはじめ。その頃に潜水眼鏡を使用するようになり、採貝採藻や魚とりが容易になった。その後しゃ引きでメジカガツオを釣ったり、小マグロを手釣りする建マグロ漁なども伝習し、それが盛んになって平松・小泊において数十隻のマグロ船を有するようになった。釣り具の改良は、トンボマグロのはえ縄漁・鰹釣の二本竿で、網では棒受網でムロやイワシを漁する。また八太網といって小網の改良したものや、その他トウゴロイワシ網やキビナゴ刺網も改良された。

最も古い歴史を持つエビ網とキビナゴ地曳網は年々盛況である。エビ網の数は 400 張余り、冬春期に毎晩 250 張使用する。またキビナゴの地曳網は、下地・小泊が毎朝交代で地曳きをする。

海藻はテングサ・フノリ・アマノリなどで、採取時期になると「口明け」をする。

漁獲高は年々一定しないが、これは海流黒潮の変化によるものである。

明治の終り頃の周参見の漁業者は 210 戸 1,313 人で、漁船数は 97 隻である。この頃の漁業者は、網元に雇用された「カコ」で使用人である。

それが大正・昭和と時代が移ると共に自前の船を持って独立するようになり、昭和の初め伝えられたケンケン釣り漁法により、更に独立船は多くなってきた。現在周参見港に属する船は 94 隻である。



【周参見港に係留しているケンケン船】
(写真提供：周参見公民館)

②林業

中世の頃より杉桧の植林につとめ、近世ますます盛んになった。特に明治になってからは価格が高騰したため、植林業は特に盛んになった。それが昭和の時代まで続き、特に第二次世界大戦の戦災による住宅焼失の復興のため、いわゆる熊野材の需要は実に盛んで、土地の人々は財産蓄積のため杉桧植林を取得することが一つの夢であったほどである。

それが現在、外材の輸入と新建材の進出により日本材の需要は低迷し、山林業は最悪の状況で山林所有者は植林の手入れもできず、その不況のため呻吟している。

この間、戦前までは周参見港から船積みの輸送であったが、戦後は鉄道や陸送の発達によりその役目を終えた。

また木炭や薪の産出は、江戸時代には藩の御仕入役所の支援のもと多く産出された。特に木炭としての品質は、「紀州備長炭」としてこの辺の山に自生する馬目樫の木を原料にしたものが最高で、船積みにして和歌山・大阪・江戸に輸出していた。

「明治になって御仕入役所が廃止されてからは、仲買業者の競争により木炭の濫製となり、その結果原木の乱伐によって製炭業は頓挫したが、中頃よりまた盛んになった（郷土誌）」現在も「備長炭」の製炭は少数ながらおこなわれており、特殊の需要に応じている。

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

(1) 遊里

①料亭

千石船や汽船の寄港した江戸・明治時代には、乗組員や乗客が時間つぶしに町中を徘徊することが多かったと思う。勢い町通りには、それらの人を目当てにした商売が軒を並べたことだろう。特に飲食関係の店が多く出るのは当然の事だろう。なかには脂粉の女性のいる店もあって、夜ともなれば三味線太鼓の音も流れていたらしい。

郷土誌には、「周参見おばはぎ大島おじはぎとて船人の戯れ加えたる諺にて、其の土地の繁昌を証明するものなり。『二度と行くまい丹後の宮津縞の財布がからになる』というも畢

境同諺なるべし」とある。

「周辺の山里の酒好きの男性、上方に行く所用ができ汽船に乗るため1日かけて周参見まで出てきた。宿屋の夕食についていた1本ですっかり機嫌が良くなって町に出て行き、在所では見られない脂粉の女性の笑顔に誘われて店に入り、すすめられるままに1杯2杯と飲んでいるうちにすっかり出来上がり、気付いた時には財布が空になって旅費をすっかり飲んでしまっていた。」という話を聞いたこともある。

(2) 文芸

① 来遊文人

西行法師や源俊頼・藤原清輔などの平安歌人が、周参見を題材とした和歌を詠んでいることはすでに紹介した。江戸時代にはいつてからは、大辺路を通る熊野参拝客は少なくなり、専ら中辺路が利用されていた。それでも海添いの大辺路の景観に憧れて来訪する文人墨客も少なくなかった。

寺内安林 天和2年(1682)「熊野案内記」 河内の俳人

「すさみという津あり、入江なり。舟着きなり。海中にいなづみ弁財天あり。この前後に漁舟多し。或は舟または岩の上にて鰹など釣るなり。」

菊池元習 享和2年(1802)「三山紀略」 紀州藩士 儒学者

「周参見浦を得。一島中立し倚る所無し。蒼然として海門を圧する者を稲積島と曰う。土人言う。海口暗礁多し。その大なる者を亀巖となす。若し誤りて之に触るれば巨船即ち破摧すと。一阜踰ゆ。道の右に清人尤廷玉の墓有り。明和中福州の商船漂泊す。商客十数名廷玉は其の一なり。病死す。司命有りて葬る。碑の陰文は祇園餐霞先生書する所なり。」

横井金石 文化元年(1804) 「金石上人御一代記」 修験者

「長井坂の頂上にも御茶屋を設け、長さ三間入り壺間半外に薄縁の蕙を敷く。供奉の面々をも御馳走有。此处南海を見晴らして無双の絶景なり。暮れに及び周参見浦へ入御。さて夕方より前夜にこりて人夫を令し、松明数千燃し連ね、列の前後を囲焼す。幾らともなく陸続として夜変じて昼となる。誰かこの経営に預る者ならんや。御宿坊は万福寺という禅寺なり。先駆の役人、郡奉行、代官、村役人等宿境に出て迎ひ奉り護送すること至って嚴重なり。春日明神、王子権現等へ御拝礼御初穂奉る也。」(三宝院門跡大峰入りの随行記)

斎藤拙堂 万延元年(1860)「南遊志」 津藩士 儒学者

「三里にして周参見に抵る。碧湾丹崖、匝すに島嶼を以てし、舟舶其の内に湊る。民戸五百、郡官の行署在り。宰村上某人をして余を迎へしむ。余乃ち造り訪ふ。某盛饌を庁上に設け、下吏交来りて飲を勧む。酔を尽くして辞去す。」

他に多くの文人墨客が紀行文に周参見の事を記している。

② 俳諧

周参見でも幕末に至って俳諧が盛んであったらしく、文化7年(1811)の王子神社絵馬に「奉納四季発句一千集」がある。

横 2m 縦 50cm の扁額で、板に墨書きされている。総数 52 句。選者は田辺組大庄屋で、当時全国的にも名の知れていた俳諧師田所八郎左衛門である。

巻頭句 若竹と裸のつれのすずみかな 巴竜

(3) 祭り

①王子神社例祭

「王子権現宮の儀領主時より毎年9月9日祭礼にて神輿担ぎ渡り御座候。」(文化13年(1842)古文書)

王子神社は天文15年(1546)の創建以来、秋祭りを実施してきたらしい。その伝統は今も受け継がれ、10月9日に例祭をおこなっている。

祭のメインは神輿渡御である。渡御の列は先頭が獅子屋台で、笛太鼓の音もにぎやかに道中の曲を奏でながら進む。お道具がそれに続く。社名旗、12幣そのあと各種武具等都合30人前後となる。12幣とは那智大社12社権現の扇神輿のミニチュアである。そのあとに祭典執行の責任者の「金幣」と時期責任者「御神酒すず」、そして担い手8人による神輿が続く。次に神船と山車が氏子や子供たちの手で引かれ、総勢相当の長い列となる。

渡御は下地浜まで行き、神輿は潮垢離の後御仮屋の中へ稲積島に向けて据えられる。

関係者は盛大に昼食をとり、午後神輿還御となる。道中お伊勢音頭が賑やかに歌われるが、歌詞は極めて卑猥である。

これが460年にわたって続けられている祭典行事であるが、獅子舞は明治以後導入されたもので、神前で演舞を奉納する。

最近に至って若者不足や町民の神社離れなどがあり、祭典運営も困難なものになりつつある。

(4) 施設

①歴史民俗資料館

昭和55年(1980)にすさみ町によって王子神社境内に建てられた。1階2階に展示場があり、上ミ山古墳の出土品をはじめ、農林水産業の今は使われなくなった諸道具や昔の生活用品などを展示している。

館内目を引く展示物は王子神社に奉納された絵馬で、総数55点のうちほとんどが常時展示されている。

5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

(1) 港発祥の地

①遺跡：串の戸石碑群

1) 尤廷玉(ゆうていぎょく)の墓

安永9年(1780)中国の商船が遭難し、千葉県に漂着した。乗組員を中国へ護送中、船員尤廷玉が発病重態となり周参見港に寄港死亡した。藩主の命により立派な墓を作った。紀州藩の外交の理念が伺える遺跡である。

2) 正念元心居士(谷三郎左衛門の墓)

江戸中期、土佐の浪人が匿名のまま飄然と周参見にやってきた。才知に富み有能であったので厚遇され、谷三郎左衛門と改名、たちまち庄屋まで昇進した。

当時の周参見は渚から町中まで遮るものはなく、大波はしばしば町中まで打ち込んでい

た。彼はこれを見て対策が急務と考え、村民を説得して波除け堤防を築いた。

享保4年（1719）、年貢米を工事に流用した疑いで藩に召喚されたので、高野山にのぼって出家した。

村民はその徳を慕い、墓碑を建てて永く弔った。

3) 平運丸関係4碑

明治4年（1871）淡路稲田藩士が北海道入植渡航中、紀伊水道で台風に遭い周参見港に避難入港の際暗礁に触れ沈没し、多くの犠牲者を出した。

それらの犠牲者の慰霊の為4基の石碑が建たれている。

この出来事は、船山薫の小説「お登勢」に詳しく描かれている。

4) 汽船和歌山丸遭難死者の碑

明治43年（1910）5月11日、周参見港に碇泊中の和歌山丸は、乗客乗員95名を乗せたまま、折からの暴風大波の為湾外へ錨を引きずりながら流し出され、岩礁に乗り上げて沈没、64名の死者を出した。

この碑の建てていた元の場所からは、国道作業中多数の人骨が発掘されている。



【尤廷玉の墓】
（写真提供：周参見公民館）



【正念元心居士（谷三郎左衛門の墓）】（写真提供：周参見公民館）



【汽船和歌山丸遭難死者の碑】（写真提供：周参見公民館）

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

1. 稲積島の保存

周参見港湾が枯木灘の避難地として古来より重要視されてきたのは、自然の環境によることが大きい。

「スサミ」という地名の語源は、「荒ぶ海」の発音の詰ったものだと言われている。事実この附近の海は、台風や季節風の影響で年中荒れている。時化に弱い昔の船は常に周参見港を頼りにしていたのである。

湾口の中央にあって大波の進入を遮り、湾内を静かにするのが稲積島であった。もしこの島がなかったら、周参見は附近の他の漁村と変らない平凡な浦であったにちがいない。

その貴重な稲積島を保存するために、古来の住民が伝え守ってきたのが、全島を神聖視するという信仰であった。この浦に住む人々にとっては、稲積島は台風や津波の大波を防ぎ、魚・貝・海藻の海の幸を恵みもたらし、その上外部からの寄港者を招来してくれる最高の神の存在であったのだ。一木一草一石たりとも持ち出すと神罰が下るという素朴な信仰心が、島の存在を有史以来江戸期まで持続してきたのである。

しかし、明治維新による文明の進化は交通の発達とともに都会の新しい文化を運び入れ、それまで本州における自生の北限地とされていた島内に繁茂する「オオタニワタリ」が、観葉植物として都会人の目にうつり、その濫獲により遂に絶滅してしまったほどである。

紀州の生んだ世界的碩学で自然保護の先駆者である南方熊楠が、松村任三博士に送った書簡の一部に、「周参見浦の稲積島は樹木多き小島なり。(中略) この島神甚だ樹を惜むと唱えて草木をとらず。小生も此島固有の名産タニワタリ一本とりにやりしに杉の幼木一本買い、代わりに植え返したり。(中略) 此の島周参見の汽船の着く所に近きを便利とし、此の頃は大阪より植木屋多く入り込み何のわけもなくおびただしく引きぬきたる由(中略) 悪行勝手次第なり」と書いている。

昭和5年(1930)に着工した稲積島下の口締切り工事に関して、当時は当地永年の願望の実現と長引く不況による失業対策事業として大いに歓迎されていたが、一部自然保存の観点から憂慮するむきもあつたとみえて、時の町助役が先述の南方熊楠に意見を聞いたところ、その返信の書簡に「つまり水産が土地より遠ざかり行く等いろいろ難事が生じ申すべく候」「むやみに郷里の土地や海面をいろいろことならんことを御すすめ申し上げておく」等の文言を書き、反対の意向を示している。

戦後一時期観光ブームが起こってきた頃、稲積島一周の周遊道をつけて観光スポットにしてはという声の一部があつたが、自然保護の声も多くあり沙汰やみになったこともあつた。

昭和46年(1971)、稲積島は亜熱帯植物の繁茂する「稲積島暖地性植物群落」として、国指定天然記念物に指定された。

以来国法により厳重に保護されている。

2. 王子神社絵馬の保存

江戸より明治にかけて王子神社に奉納された絵馬は、当時の千石船の船主がその航海の無事を祈って奉納したものである。周参見港がかつて千石船の寄港地であったことを証明

するに足りる痕跡が何も残っていない今日、それに代わる唯一の遺物である。既述の通り総数 55 点あり、保存状態が極めて良好である。

縦 3 尺 (90cm) 横 1 間 (180cm) に及ぶ大型絵馬 10 点は、歌舞伎や浄瑠璃の名場面を写したものが多く、すべて上方の専門の絵師による力作である。小型の船絵馬 31 点はいずれも大坂絵馬藤筆が多く、典型的な千石船の航行図である。他 14 点のうちには、存在が貴重とされる算額をはじめ歌額句額などがある。

すさみ町教育委員会は、1960 年頃よりそれらを順次補修の上ガラス張りとし、町指定文化財に指定し、昭和 55 年 (1980) 建設した王子神社境内の歴史民俗資料館において保護展示している。

なお全 55 点をプロ写真家撮影による大版写真集 (25×36 cm) として印刷発行し、大型絵馬に関する詳細なる解説、その他必要なる解説文を付記している。

3. すさみ八景

町は昭和 56 年 (1981)、町内の観光スポットとして、すさみ八景を指定した。稲積島・上ミ山古墳からの眺望・その他 6 箇所、先の 2 箇所は周参見湾を一望できる。稲積島を配した景観は、往時の千石船や汽船を浮かべた周参見湾を彷彿とさせるものである。

4. ユネスコによる「世界遺産」の指定

平成 16 年 (2004) 7 月、ユネスコは「紀伊半島の霊場と参詣道」を世界遺産に指定した。霊場は熊野三山・高野山・伊勢神宮・大峰山等を指し、参詣道は中辺路・大辺路・小辺路・伊勢路・大峰奥駆道等を指す。

すさみ町には大辺路の「長井坂」「仏坂」の二つの古道があり、長井坂は太平洋を一望する峠道で、その眺望はまことに素晴らしい。

この指定により、何杯もの千石船を浮かべ出船・入船の行き交う周参見湾を前方に、東に長井坂、西に仏坂の難険を配し、口熊野 5 組 157 村の代官所を有する郡都として繁栄した往事の周参見の姿がよみがえる思いがするのである。